

太宰治の「思ひ出」における「赤い糸」と中国の赤 縄説話：沖縄に伝わる赤縄説話と「吉備津の釜」に おける「赤縄」を中心に

劉, 金宝
九州大学大学院比較社会文化学府：博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/1495355>

出版情報：九大日文. 23, pp.2-13, 2014-03-31. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

太宰治の「思ひ出」における 「赤い糸」と中国の赤繩説話

——沖繩に伝わる赤繩説話と「吉備津の釜」における

「赤繩」を中心に——

劉金宝

はじめに

太宰治の「思ひ出」は昭和八年四月、六月、七月に、三回に分けて「海豹」に連載された三章からなる小説であり、四歳から中学生最後の冬休み（十八歳）までの十五年間の生活史を綴った太宰治の回想である。「思ひ出」の第二章には次のようにある。

秋のはじめの或る月のない夜に、私たちは港の棧橋へ出て、海峡を渡ってくるいい風にはたと吹かれながら赤い糸について話し合つた。それはいつか学校の国語の教師が授業中に生徒へ語つて聞かせたことであつて、私たちの右足の小指に目に見えない赤い糸がむすばれてゐて、それがするすると長く伸びて一方の端がきつと或る女の子のお

なじ足指にむすびつけられてゐるのである、ふたりがどんなに離れてゐてもその糸は切れない、どんなに近づいても、たとい往来で逢つても、その糸はこんぐらかることがない、そうして私たちはその女の子を嫁にもらふことにきまつてゐるのである。私はこの話をはじめて聞いたときには、かなり興奮して、うちへ帰つてからもすぐ弟に物語つてやつたほどであつた¹⁾。

ほぼ十年後の昭和十九年に刊行された「津軽」にも、この一節がそのまま引用された。

ここに出てくる、結婚相手を結びつける目に見えない「赤い糸」というモチーフの典故について、渡部紀子は「唐代の伝奇小説集『続玄怪録』中の「定婚店」の話に見える「赤繩」の故事の由来を、アレンジして話したものか²⁾と指摘している。

また、赤繩説話の日本における受容という視点から一連の考察³⁾を試みた古田島洋介は、太宰治の「思ひ出」について、「私は青森中学校に入つたとき太宰治は三年生であつた。（中略）私たちの一年生のとき、新任の橋本誠一先生から、結婚するもの同士をつないでいる、目に見えない赤い糸の話聞いたが、太宰は三年生の教室でもこの話を聞いたのであろう」⁴⁾という太宰治の中学校時代の後輩である小野正文の証言を根拠として、「橋本教諭は「定婚店」を踏まえて赤繩故事をほぼそのまま生徒たちに語り聞かせたのではなからうか」と論じている。これらの先行研究はいずれも示唆に富むが、太宰治の「赤い糸」という

モチーフの出典についてはさらに再考の余地が残っていると思われる。本稿ではこの問題について具体的に再検討してみたい。

一、中国の赤繩説話及び日本における受容

赤繩説話の初出と見られる「定婚店」は唐代の李復言の作『続玄怪録』(『続幽怪録』とも言う)巻四に収められている。後に宋代に編纂される『太平広記』(巻一五九)などの叢書にも収録されている。「定婚店」において、「赤繩」の現れる部分は次のようである。

因問囊中何物。曰、赤繩子耳、以繫夫妻之足。及其生、則潜相繫。雖讐敵之家、貴賤懸隔、天涯從宦、吳楚異郷、此繩一繫、終不可違^⑤。

(そこで袋の中にある物は何かと尋ねると、老人は「赤い繩です。これで夫婦となるものの足を結びつけるのだ。人が生まれるところそりと結びつけるのだが、たとえ敵同士の家に生まれても、身分が隔たつても、地の果てに赴任しても、吳と楚のような遠く異郷にいても、この繩で一たび結ばれたら、もう逃れることはできないのだ」と答えた。——拙訳。以下同じ)

ここに出てくる「赤繩子」は赤繩説話の初出と見られる。結びつける部位は明確に「足」と決まっております、結ばれる時期は「及其生、則潜相繫」(人が生まれるところそりと結びつける)とあ

るように、生まれた時に設定されている。

時代が下つて、五代十国時代(九〇七年—九七九年)の范資の『玉堂閑話』に「灌園嬰女」という話がある。この話において、「赤繩」は登場しないが、夫婦になるべき男女が「宿縁」によつて結ばれている。この話を「定婚店」に重ね合わせてみると、この話における「宿縁」と「定婚店」における「赤繩子」が同じ位置を占めている。すなわち、「宿縁」||「赤繩子」という点は注意すべきところである。

宋代以降、「定婚店」における男女が夫婦となる運命の象徴である「赤繩子」は、多くの作品で「赤繩」「紅繩」または「紅線」と呼ばれるようになり、また「定婚店」で人間の婚姻を司る存在である「幽吏」(冥界の役人)が、「月下老人」(「月老」または「月下老」という神様として後世の文学作品に登場するようになった)。

赤繩説話の日本における受容については、古田島の論に従い、それを概観してみよう。「定婚店」を収録している『続玄怪録』は『説郛』(明代)、『五朝小説』(明代)などの叢書に収められているが、これらの叢書が赤繩説話の受容に関与したとは考えにくい。なぜかと言うと、先の『太平広記』や『説郛』、『五朝小説』はどれも数百巻にのぼる大部の書物で、「定婚店」はたまたその膨大な話群の一つに過ぎないためである。古田島は十七世紀後半(江戸時代初期)に和版で刊行された『書言故事大全』における「赤繩繫足」、『故事成語考』における「韋固与月老論婚始知赤繩繫足」、『円機活法』における「月下老」などに注目し

ており、江戸時代にこの三書が流行し、中でも『書言故事大全』と『円機活法』は十数回に涉って刊行されたことを明らかにしている。このように流行した説話集によって、赤繩説話は次第に江戸時代の人々に知られてきたのであり、同時に、翻訳や翻案などの受容の基礎が築かれたと考えられる。

また、三作において、「赤繩」の結ばれる部位は「足」に限定されている。結ばれる時期については、『書言故事大全』と『故事成語考』には書かれていない。『円機活法』にも明記されていないが、ヒロインは二歳ばかりで、すでに主人公の章固と結ばれているから、結ばれる時期は生まれた時と見なしにくいであろう。

次に日本において赤繩説話が受容された例を検討してみる。古田島によると、赤繩説話が現れた日本の作品中、もつとも古いのは宝永三年（一七〇六年）に成立した青木鷺水の『御伽百物語』にある「宿世の縁」である。「宿世の縁」において、「月下の老」と「赤き繩」という表現が見られる。「月下の老」は固有名詞として使われている一方、「赤き繩」も男女を引き合わせる道具として現れているから、明らかに中国の赤繩説話を受容したものだと言えるであろう。『御伽百物語』の成立した宝永三年までの数十年間で、『書言故事大全』、『故事成語考』、『円機活法』はいずれも数回に涉って刊行されているから、「宿世の縁」の作者がこの三作の何れかを読んだのはほぼ間違いないと思われる。「赤繩」に関する描写において、結ばれる部位は明記されておらず、また結ばれる時に男が書生で、女が十四、

五歳だから、明らかに生まれる時ではないという点が注目される。

もう一つの受容の例として柳沢淇園の「ひとりね」が挙げられる。「ひとりね」は享保十年（一七三五年）前後に書かれた柳沢淇園の随筆である。その中に中国の説話を翻訳して紹介した部分が多くある。「ひとりね」における「赤繩」については、結ぶ部位は「あしと足」と表現している。一方、結ぶ時期は明記されていないが、二歳ばかりの女の子が主人公の章固と結ばれているという設定から、生まれた時に結ばれていると読めるであろう。これも柳沢淇園は底本の『円機活法』の「月下老」からそのまま踏襲したと思われる。

ここでは、主に説話の用例を挙げて検討したが、古田島によれば「赤繩」という語の日本における用例も多くある。具体的には古田島の論文を参照していただくことにする。

次に日本の昔話を見てみたい。沖繩の話ではあるが、『日本昔話通観』第二六巻「沖繩」篇に次の様にある。

昔、唐の国で、「ぜひ学問をせねば、学問こそが宝である」ということで、自分の国から遠い中央の方に上り、（たとえば私達奥間でいえば、首里で学問をしようという事）山道も自分一人で歩いて学問にはげんだ青年がいたということですよ。その青年は、三日も八日もずっと歩きつづけた後、歩きつかれたので、「ちよつと休んでから行く」という事で、木の下に休んでいると、そこに立派な髭

を生やしたおじいさんが現れ、二人して、いろいろと話をしているうちに話のついでとして、青年が「人は妻をめとったり、旦那さまを見つけたりするのは、生まれた時から縁で結ばれているからだという事ですが、ほんとうでしようか」という事をおじいさんに聞いたんだそうです。

そしたら、そのおじいさんは「あなたは、まだこれから分らないのですか。それは本当ですよ。生まれると指の先からの赤い糸で、男と女それぞれ結ばれるという事ですよ。ですから世の中は、いくら親兄弟が反対しても結ばれるものは結ばれるし、どんなに勧めても結ばれないものは結ばれないという事があるのは、昔からそういう伝えがあるからですよ」とおじいさんが言っただそうです。すると、この学問に励む青年は、「そしたら、私にも縁の結ばれている女の人がいるのでしょうか」と聞いたわけです。「あー、いますよ。あなたも足を赤い糸で結ばれているのですよ」とおじいさんが言うと、青年は「すると私と縁の結ばれている女の人というのはどんな人なんでしょうか」と聞いたということ。するとその時向こう側から女の人が薪をもつて通つてゆくのが見えて、「ほらほら向こうから歩いてくる女の人、あなたと赤い糸で結ばれているのは向こうからくる女の人ですよ」と言つたそうです。見ると色の真つ黒なみすばらしい着物をつけた女の人がそこに立っていたのです。⁶⁾ (傍縁は筆者)

舞台は「唐の国」に設定されている一方、ここに出てくる「赤い糸」は夫婦になるべき男女を結ぶという働きにおいて、中国の赤繩とまったく同じであり、この説話が中国の赤繩説話を受容したものであることはほぼ間違いないと思われる。中国の赤繩説話がどんな経路を通して沖繩に伝わったか現在不明であるが、『日本昔話通観』には幾つかの類話が収録されており、この説話は沖繩でかなり流布したようである。

一方、「縁」で結ばれたり、「赤い糸」で結ばれたりするよう
に、「縁」|| 「赤い糸」という図式が明確に現れる。おそらく
「赤い糸」は「定婚店」における「赤繩子」から、「縁」|| 「赤
い糸」という図式は「灌園嬰女」における「宿縁」|| 「赤繩子」
という図式を踏襲したものではないかと考えられる。換言すれば、この沖繩の赤繩説話(類話は日本各地に散見するが、他の地方で
伝わる話には「赤繩」とか「赤い糸」とかいうモチーフはまったく登場しな
いから、一応「沖繩の赤繩説話」と呼ぶことにする)は「定婚店」と「灌
園嬰女」を組み合わせて成立したものである。また、ここに
おいて、「赤い糸」が結ばれる時期は「生まれる時」と明記し
ている一方、結ばれる部位が「足の指先」に設定されている点
は注意すべき所である。

二、橋本誠一の話

前述したように、大宰治は中学校三年の時(大正十四年)、教師の橋本誠一から「赤い糸」の話を聞いたようである。小野正

文の証言は、太宰治が「赤い糸」の話に触れたルートと時間の判断材料としては、重要な記録だと言えるが、橋本が生徒たちに言い聞かせた話の内容については、「目に見えない赤い糸の話」としか述べていないので、橋本の話の内容を推測するには、太宰治の作品に目を向けるしかない。次に太宰作品における限られた手がかりによって、橋本の話の内容、ひいてはその話の典拠について検討してみよう。

①橋本の話には身分の格差または、それによる家族の反対を表現する箇所があったと推測される。

「思ひ出」には、「私はこの話をはじめて聞いたときには、かなり興奮して、うちへ帰つてからもすぐ弟に物語つてやつたほどであつた」とある。一般的に、「赤繩」に関する話を聞いて、その赤い繩を不思議に思い、ロマンチックに感じるのは自然なことであろうが、「かなり興奮」し、「すぐ弟に物語つてやつた」という太宰の反応はなにか特別な理由があることが推測される。それでは何故、太宰はこの話にここまで強くひきつけられたのか。例えば私たちは歌を聞く時、その歌詞の内容が自分の心境または経験と一致すると、その歌に深い興味を覚える。同じように橋本の話のある部分が太宰の心境と重なって、彼の心を引き寄せたのではないだろうか。「思ひ出」には、冒頭の引用した部分のすぐ後に次のようにある。

私たちはその夜も、波の音や、かもめの声に耳傾けつつ、

その話をした。お前のワイフは今ごろどうしてるべなあ、と弟に聞いたたら、弟は棧橋のらんかんを二三度両手でゆりうごかしてから、庭あるゐてる、ときまり悪げに言つた。

大きい庭下駄をはめて、団扇をもつて、月見草を眺めてゐる少女は、いかにも弟と似つかわしく思われた。私のを語る番であつたが、(中略)これだけ弟にもかくしてゐた。私がそのとりの夏休みに故郷へ帰つたら、浴衣に赤い帯をしめたあたらしい小柄な小間使が、乱暴な動作で私の洋服を脱がせて呉れたのだ。みよと言つた。

ここに出てくる小間使の「みよ」のモデルは宮越トキという津島家の女中である。「成長するにつれ、自ら恋に目ざめていき、実家の女中宮越トキに恋情を感じ」⁽⁸⁾という渡部芳紀の指摘が示唆に富むと思われる。

青森県下有数の大地主の六男でありながら、女中と恋仲になつた場合、周囲からの批判や、親兄弟から反対の声が出るのは想像に難くないであろう。十七歳(大正十四年)の太宰が女中の宮越トキに恋を感じた瞬間、頭をよぎつたのは地主の息子と女中という身分の格差を問題視した長兄文治(父の逝去した大正十二年から家督を継いだ)の口から出る反対意見であろう。そのような時に、「身分が違つても、家族が反対しても、赤い糸で一たび結ばれたら、必ず夫婦になる」というような話を聞いたとしたら、宮越との身分の格差を憂慮している者としては一筋の希望を感じて、興奮するに至るのではないか。つまり、橋本の

話に身分の格差または、それによる家族の反対を表現する箇所があつたのだと推測される。

②橋本の話において、糸が結ばれる時期は「生まれた時」である。

太宰治の「未発表資料」として、中学校時代の日記の大正十五年一月二十六日の条に、次のようなものが見える。

先生の話「生まれた時に、もはや既に足にヒモが結ばれている」。

余、誰？⁹⁾

大正十四年四月から大正十五年四月までは、太宰が青森中学校に三年生として在学していた時期である。小野正文の証言によると、橋本の話聞いたのは太宰の三年生の時であるから、この日記は橋本の話聞いた直後のものであると推測される。日記における「先生」は言うまでもなく、橋本誠一である。「余、誰？」は、自分が一体誰と赤い糸で結ばれているのかという疑問である。太宰は橋本の話借りて、自分の心境を述べているのである。

「思ひ出」においては、「赤い糸」が結ばれる時期が描かれていないが、この日記において、ヒモが結ばれる時期は「生まれた時」に設定されているから、橋本の話において、結ばれる時期が「生まれた時」と設定されていたのはほぼ間違いないと思

われる。ちなみに、「思ひ出」における「赤い糸」に対して、この日記に出てくるのは「ヒモ」である。おそらく橋本の話には「赤い糸」が出てきたのであろう。太宰治は「思ひ出」において、それをそのまま踏襲したが、日記においては、「赤い」を省略し、「糸」を意味合いの近い「ヒモ」に改変したと推測される。

以上のことをまとめると、橋本の話に、身分の格差または、それを問題視する家族の反対を表現する箇所があつたと推測され、結ばれる時期は「生まれた時」と設定されていたと考えられる。この二つの条件を手がかりとして、橋本の話の典拠を探ってみよう。

古田島の論文を参照すると分かるように、「赤繩」という語の用例は日本の文学作品に散見する。しかし、そのほとんどには、「赤繩」という言葉、または「月下老は赤繩で男女の足を結ぶ」という要素しか現れておらず、「赤繩」に関する具体的な描写が見られないため、橋本の話との関連が希薄であるという感が否めない。そこで「赤繩」に関する具体的な描写の見られる文献に目を向けてみたい。

先に示した赤繩説話の日本語訳の嚆矢とされる「ひとりね」において、「此繩一たび結びぬれば、たとへかたきどふしの家、或は国を隔て、いか成遠き人なりとて、夫婦に成こと疑ひなし」という「赤繩」に関する表現が見られる。これは底本の『円機活法』における「雖仇家異域、此繩一繫、終不可易」という部分を訳出したものであろう。結ばれる時期については、両作

とも明記していないが、先に述べたように、二歳ばかりの女の子が主人公の草固と結ばれているという設定から、ほぼ生まれした時から結ばれていると理解していいが、底本の『円機活法』にも日本語訳の「ひとりね」にも、身分の格差または、それによる家族の反対を表現する箇所は現れない。

『故事成語考』において、「赤縄」に関する描写は次のようである。「雖讐敵之家、呉楚異郷、此縄一繫、終不可道」（たとえ敵同士の家に生まれても、呉と楚のような遠く異郷に居ても、この縄で一たび結ばれたら、もう逃れることはできない）。ここにおいても、身分の格差または、それによる家族の反対を表現する箇所や赤縄を結ぶ時期についての言及は一向見られない。

『書言故事大全』では、「赤縄」について「雖讐敵之家、呉楚異郷、貴賤懸隔（懸隔、言相隔遠）、此縄一繫、終不可道」（たとえ敵同士の家に生まれても、呉と楚のような遠く異郷に居ても、身分が隔たっても、この縄で一たび結ばれたら、もう逃れることはできない）と表現されている。身分の格差を表現する「貴賤懸隔（身分が隔たっても）が見えるが、赤縄を結ぶ時期は明記していない。

「定婚店」においては、「及其生、則潜相繫。雖讐敵之家、貴賤懸隔、天涯從宦、呉楚異郷、此縄一繫、終不可道」というように、「赤縄」を描いている。身分の格差を表現する箇所としては「貴賤懸隔（身分が隔たっても）が見える一方、結ばれる時期は「及其生、則潜相繫」（人が生まれると、こっそりと結びつける）と明記されている。これらのことから、橋本の話の底本は「定婚店」であると考えることができる。

一方、沖縄の赤縄説話における「赤い糸」については、結ばれる時期は「生まれる時」と書いてあり、さらに「いくら親兄弟が反対しても結ばれるものは結ばれる」という家族の反対を表現する箇所もあるので、先に挙げた二つの条件を満たしている。よって、橋本の話の典拠は「定婚店」と沖縄の赤縄説話の何れかであるのはほぼ間違いないと思われる。

橋本の話の典拠は一体どちらか、という疑問を解き明かす決め手は「思ひ出」における次の箇所にあると思われる。

私たちはその夜も、波の音や、かもめの声に耳傾けつつ、その話をした。お前のワイフは今ごろどうしてるべなあ、と弟に聞いたら、弟は棧橋のらんかんを二三度両手でゆりうごかしてから、庭あるみて、ときまり悪げに言った。大きい庭下駄をはめて、団扇をもつて、月見草を眺めてゐる少女は、いかにも弟と似つかわしく思われた。私のを語る番であつたが、私は真暗い海に眼をやつたまま、赤い帯しめての、とだけ言つて口を噤んだ。

大宰治は教室で橋本から「赤い糸」の話聞いてから、すぐ弟に言い聞かせた。後の或る時期に二人がこの共通の話題について話し合っていると設定されており、二人の話はある意味では、橋本の話の延長線上にあるはずであろう。「お前のワイフは今ごろどうしてる」とか「庭あるみて」とか「団扇をもつて、月見草を眺めてゐる」とかいう表現から見ると、橋本の話

におけるヒロインは赤ん坊ではないと推測される。「定婚店」におけるヒロインは二歳ばかりの赤ん坊であるの対して、沖繩の赤繩説話におけるヒロインは「薪をもって歩いてる」少女であるから、橋本の話の典拠は「定婚店」であるより、沖繩の赤繩説話である可能性の方が高いと言えよう。逆に、橋本の話の底本が「定婚店」であつたとしたら、そこに出てくる「天下の婚姻を掌る冥界の役人（月下老人の前身）」については、語り手の橋本でも聞き手の太宰でも見逃さなはずであろう。結局、「思ひ出」にその「冥界の役人」が見られないのは、橋本の話の底本が「定婚店」でないことを傍証しているのではないかと考えられる。

また、沖繩の赤繩説話における主人公は「学問に励む青年」と設定されている。中学時代の太宰治と対照してみよう。

「衆にすぐれていなければいけないのだ、という脅迫めいた考え」から、太宰は勉学に励んだ。その結果、学業成績は優秀で、第一学年の第二学期からは級長に任ぜられ、以降在学中ずっと級長をつとめている。第四学年を終了したときの成績は及第百四十八名中の第四席であり、四年終了で弘前高等学校の入学試験に合格したのだから、まずは天晴れの秀才ぶりと言えよう⁴⁰。

それまで、ずっと「勉強家」や「秀才」と言われていた中学三年の太宰治は沖繩の赤繩説話におけるこの「学問に励む青年」

を自分の分身と考えて、興奮した可能性もあるであろう。

橋本誠一は何らかのルートを通して、沖繩の赤繩説話に触れて、青森地方であまり広まっていなかった新しい話として生徒に言い聞かせたのではないか。説話が口から口へ語り伝えられる過程において、いささかの変化が生じるのはありふれた現象であるから、橋本の話は先に挙げた沖繩の赤繩説話とまったく同じとは限らない。けれども、話の骨子となる要素は変化しないであろう。例えば、この赤繩説話における「赤い糸」や結ばれる時期である「生まれる時」は誰が語っても変わらないであろう。

太宰治の「思ひ出」と沖繩の赤繩説話を対照させて、他の共通点を探ってみよう。

①男女を結ぶのは「赤繩」ではなく、「赤い糸」である。これは「思ひ出」と沖繩の赤繩説話にしか見られない。

②ほとんどの赤繩説話において、結ぶ部位は足首かそれとも足の指か、言明せずに「足」としか表現していない。それに対して、沖繩の赤繩説話における「足の指先」と、「思ひ出」における「右足の小指」はもつとも近いと言わざるを得ないであろう。ただ、沖繩の赤繩説話においては、右足かそれとも左足か、及びどの指かを示していない。「右足の小指（傍点筆者）」に決めたのは太宰治の案出であろう。

③ヒロインの身なりに関する描写では、沖繩の赤繩説話に「みすばらしい着物をつけた」とあるのに対して、「思ひ出」において、「大きい庭下駄をはるて」いるとか、「赤い帯しめて」い

るといった表現が見られる。他の赤繩説話にはヒロインの身なりに関する描写はまったくない。

つまり、橋本の話の出典は「定婚店」に拠ったのではなく、沖繩で伝わる赤繩説話であると推測される。恣に目覚めた太宰治はこの話を聞いて、運命の象徴である「赤い糸」の不思議さを感じながら、自分の分身である「学問に励む青年」という人物設定、及び自分の心境と重なる「いくら親兄弟が反対しても結ばれるものは結ばれる」という点に心を動かされて興奮し、記憶に留めたのではないか。

三、上田秋成の「吉備津の釜」

「思ひ出」において、「私はこの話をはじめて聞いたときには、かなり興奮して、うちへ帰つてからもすぐ弟に物語つてやつたほどであった」という表現がある。「はじめて」という言葉から、太宰治は「思ひ出」の執筆までに、この赤繩説話に触れたのは一回だけではないと推測できるだろう。換言すれば、太宰は「赤い糸」の話に、橋本の語る沖繩の赤繩説話以外においても接した可能性があると言える。

古田島の指摘したように、安永五年（一七七六年）に刊行された上田秋成の『雨月物語』巻三「吉備津の釜」に、「既に聘礼を納めしうへ、かの赤繩に繋ぎては、仇ある家、異なる域なりとも易ふべからずと、聞くものを」という表現が見られる。周知のように、「思ひ出」と同じ時期に成立した「魚服記」は、

「雨月物語」の「夢応の鯉魚」にヒントを得て書かれたものである。太宰は「魚服記に就いて」の中で、「魚服記といふのは支那の古い書物にをさめられてゐる短い物語の題ださうです。それを日本の上田秋成が翻訳して、題も「夢応の鯉魚」と改め、「雨月物語」巻の二に収録しました。私は切ない生活をしてゐた期間にこの雨月物語をよみました……」⁽¹¹⁾と説明をしている。太宰は「魚服記」の創作に先立つて、『雨月物語』を読んだのは事実であるが、どの版本を読んだか、つまりこの「魚服記について」で言及した「雨月物語」がどの本であるかは、先行研究では、言及されていない。

「魚服記」の題名はおそらく鈴木敏也の『雨月物語新釈』⁽¹²⁾または『新注雨月物語評釈』⁽¹³⁾の中に出てくる、「夢応の鯉魚」の底本である『古今説海』の「魚服記」の題名をそのまま踏襲したものであろう、というような山内祥史⁽¹⁴⁾の指摘が示唆に富むと思われる。『新注雨月物語評釈』は『雨月物語新釈』の再版である。両書は内容においてほぼ変わらないので、太宰がどちらに拠つたかを特定するのは難しいが、手元にある『新注雨月物語評釈』を参照しながら、考察を進めたい。

『新注雨月物語評釈』第二編第二章第二節の「説話の先蹤」に「支那小説『古今説海』第九巻に見える魚服記の翻案である」⁽¹⁵⁾と記され、『古今説海』の「魚服記」の原文の一部分が載っている。太宰はここから「魚服記」という題目を得たであろう。また、研究者でない太宰は秋成の原著を読んだ上で、鈴木敏也の『新注雨月物語評釈』（または『雨月物語新釈』）を読んだという

よりむしろ、原著を読まずに、直接、鈴木敏也の『新注雨月物語評釈』（または『雨月物語新釈』）を読んだ可能性が高いであろう。即ち「魚服記について」で言及している「雨月物語」は上田秋成の原著ではなく、鈴木敏也の『新注雨月物語評釈』（または『雨月物語新釈』）ではないか。そして、太宰は「吉備津の釜」における「既に聘礼を納めしうへ、かの赤縄に繋ぎては、仇ある家、異なる域なりとも易ふべからずと、聞くものを…」という所を読んだのではないか。注意すべきなのは、鈴木敏也の『新注雨月物語評釈』（または『雨月物語新釈』）において、「吉備津の釜」における「赤縄」の語釈に「赤縄云々。夫婦の約をなすこと。」とあり、その典拠として次のように記載されている。

唐韋固旅次宋城、遇老人向月檢書。因問囊中赤縄、云繫夫婦之足、雖仇家異域、此縄一繫、終不可易（幽怪録、書言故事）⁽⁶⁾

（唐代の韋固という人は宋城へ旅に出る時、月に向かって本を読んでいるおじいさんに出会った。おじいさんの持つている囊の中にある赤い縄について、韋固は聞くと、「夫婦になるべき男女の足を結ぶ。たとえ仇のある家に生まれても、異なる域に居ても、この縄で一たび結びばれたら、もう易えることはできない」とおじいさんは言った『幽怪録』、『書言故事大全』）。

「赤縄」の出典は李復言の作『続玄怪録』（『続幽怪録』）である。『幽怪録』（唐の牛僧孺の作）は別の本であり、鈴木敏也が「赤縄」

の出典を『幽怪録』としているのは誤りであろう。また、「吉備津の釜」における「赤縄」の出典、或いは秋成の参照した底本は『書言故事大全』だと鈴木は指摘している。しかし、『円機活法』における「雖仇家異域、此縄一繫、終不可易」という赤縄に関する描写と、秋成の「仇ある家、異なる域なりとも易ふべからず」とを対照して見ると、『円機活法』における「仇・「家」・「異」・「域」・「易」などの漢字をそのまま踏襲している点で、明らかに秋成の「赤縄」は『円機活法』から得たものと思われる。逆に、『書言故事大全』における「赤縄」に関する表現は次のとおりである。

雖讐敵之家、吳楚異鄉、貴賤懸隔（懸隔、言相隔遠）、此縄一繫、終不可違。

（たとえ敵同士の家に生まれても、吳と楚のような遠く異郷にいても、身分が隔たっていたとしても、この縄で一たび結ばれたら、もう逃れることはできない。）

秋成の表現と対比してみると、意味合いは両作において似ているが、秋成の表現はいっそう簡略に見える一方、両作において、漢字の影響はまったく見られない。つまり、鈴木が、秋成の「赤縄」の典拠は『書言故事大全』だとするのも誤りではないか。

太宰が『雨月物語』を読んだ時期については、弘前高校在学中（昭和二年から昭和五年まで）に江戸文学に親しんだと言われて

いるから、この時期であると鳥居邦朗が主張している⁽⁷⁾。また、今官一によると、「魚服記」の原型である「金魚繚乱」は昭和六年二月に脱稿したという⁽⁸⁾。つまり、太宰が「雨月物語」を読んだ時期は遅くても昭和六年二月までであろう。一方、「思ひ出」は昭和七年八月に書き始めたといわれる。「雨月物語」を読んだ時期は明らかに「思ひ出」の執筆以前である。太宰が橋本の話の次に「赤い糸」の話に触れたのは、鈴木敏也の『新注雨月物語評釈』(または『雨月物語新釈』)ではないか。

おわりに

太宰はまず、中学校三年生の時(大正十四年)、国語教師の橋本誠一から、中国の「定婚店」と「灌園嬰女」が融合して成立した沖繩の赤繩説話を聞いて、「学問に励む青年」という主人公と自分を重ね合わせ、「いくら親兄弟が反対しても結ばれるものは結ばれる」という点を自身の励みとして、記憶に留めたのであろう。そして弘前高校在学中に、鈴木敏也の『新注雨月物語評釈』(または『雨月物語新釈』)を読んだとき、「吉備津の釜」の「語釈」で再びこの話に触れた。後の昭和七年八月に、この話をモチーフにして「思ひ出」に取り入れたのではないか。

赤繩説話は唐代の李復言の作『続玄怪録』における「定婚店」に源を発し、「灌園嬰女」などの類話を加えて、人々に親しまれてきた。宋代に入ってから、「月下老」(「定婚店」における「幽吏」とともに、「赤繩」という表現は中国の文化の中に定着し

た。同時に文学表現として各時代の作品に登場するようになった。日本において、江戸時代に和版で刊行された『書言故事大全』、『故事成語考』、『円機活法』によって、中国の赤繩説話が当時の文人たちに知られてきた。それを受容した青木鷲水の「宿世の縁」や柳沢淇園の「ひとりね」などの作品が現れ、また上田秋成の「吉備津の釜」に出てくる「赤繩」のような、「赤繩」という語の用例が江戸時代の文学作品に散見するようになった。また、中国の「定婚店」などから影響を受けて成立した赤繩説話が離島の沖繩に伝わっている。橋本は何らかのルートを通してこの沖繩の赤繩説話に触れ、青森地方ではあまり広まっていなかったので、授業中に太宰ら生徒たちに言い聞かせたということではないだろうか。

【注記】

- 1 本稿では、「思ひ出」のテキストは『太宰治全集』第二巻(筑摩書房一九九八年五月)に拠る。
- 2 志村有弘・渡部芳紀編『太宰治大事典』二〇〇五年一月 一二頁。
- 3 「赤い糸の伝説」(『明星大学研究紀要・日本文化学部・言語文化学科』第一号 一九九三年三月)。
「赤い糸の伝説(統)」(『明星大学研究紀要・日本文化学部・言語文化学科』第二号 一九九四年三月)。
「江戸時代における赤繩故事」(『明星大学研究紀要・日本文化学部・言語文化学科』第三号 一九九五年三月)。
「明治以後の「赤い糸」」(『明星大学研究紀要・日本文化学部・言語文化

- 科』第四号 一九九六年三月)。
- 4 小野正文「太宰治の思ひ出」(『国文学解釈と鑑賞』第三十四卷第五号至文堂 一九六九年五月 五八頁)。
 - 5 『中国古典小説選』第六卷『広異記・玄怪録・宣室志他』明治書院 二〇〇八年一月 三一九頁。
 - 6 『日本昔話通観』第二六卷 同朋舎出版 一九八三年七月 三〇―三二頁。
 - 7 この説話は離島の沖繩にとどまり、本土に伝わっていないから、台湾を経由した可能性が高いと推測される。
 - 8 渡部芳紀『太宰治 心の王者』洋々社 一九八四年五月 三〇頁。
 - 9 『太宰治全集』第一巻 筑摩書房 一九九九年二月 四八五頁。
 - 10 野原一夫『太宰治 生涯と文学』筑摩書房 一九九八年五月 三七頁。
 - 11 『太宰治全集』第十一巻 筑摩書房 一九九九年三月 五頁。
 - 12 歴史名著新釈第一編 富山房 一九一六年一月。
 - 13 精文館書店 一九二九年七月。
 - 14 『太宰治全集』第一巻 一九八九年六月 四六四頁。
 - 15 『新注雨月物語評釈』精文館書店 一九二九年七月 七八頁。
 - 16 『新注雨月物語評釈』精文館書店 一九二九年七月 二六七頁。
 - 17 「水のモチーフ―「魚服記」を視座として」(『国文学解釈と教材の研究』第二四巻第九号 一九七九年九月 一二頁)。
 - 18 『太宰治全集』第一巻 筑摩書房 一九九八年六月 四六三頁。

〔付記〕『書言故事大全』・『故事成語考』・『口機活法』は入手がたいので、本稿では、この三書テキストは古田島洋介の「江戸時代における赤繩故事」に拠った。

(九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程三年)